妖女伝

伊佐山詩織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖女伝

【Ｎコード】
Ｎ１１７９Ｄ

【作者名】
伊佐山詩織

【あらすじ】
第一話「メドゥーサ」バリケードの中で出会った女はメドゥーサだった。運命に導かれるままメドゥーサとの一夜を過ごした俺は・・・。第二話「金魚」私はママのエサ係。いじめられっ子の「遠山」以外の男子はみんなママに食べられてしまった。第三話「ヒミコ」城山の洞窟は異世界への通路だった。こっちに帰ってきた僕らの話を誰も信じてくれないし・・・。第四話「官能小説の女」官能小説を書きたいんです、だから私を欲情させてください。バカなことを言うなよ。でも先生でなきゃだめなんです・・・。第五話「まつり

ごと」わがままですぐにキレるヒス女、でもこれが俺たちが祭り上げたセンセイ候補なんだ・・・。

メドゥーサ

1

三次会のスナックまで若い連中につきあわされ、少々閉口しているところに告白ゲームだと。一人づつ最初のセックスについて告白しろってか。ジャンケンで勝ったものが最初の告白人を指名して、あとは告白人が指名、告白そして指名、これを繰り返す。で、ジャンケンで勝ったのが部下の木下明美、俺が指名を受けた。みんな俺だけは避けたかったろうに、こいつは遠慮がない。

「俺か？　俺の初体験なんて聞いたってしょうがないよ」

「ううん。聞きたいんです、課長の初体験」

「この歳で童貞だったらどうする？」

五十ちかいのに独身だからな。

「ホモってオチは無しっスよ」

隣の課の若いヤツだ。

「しょうがないな。でも、前置きがかなり長くなるぞ」

「かまいません」

木下明美が少々マジな顔で言った。

「みんなは学生運動って知ってるか？」

一同頭を横に振った。だろうな。

「俺は大学は出てるが、ほとんど授業は受けてないんだ。ただし学校には詰めてた。バリケードを作ってね、その中に」

「なんか、映画で観たことあります、それ」

名前も知らない女の子が言った。

「まあ、映画だときれいに作ってるんだろうが、実際は野郎ばかりでね、きたねぇんだ。風呂にも入れずにいるから臭いしな」

「バリケードの中でやった、とか？」

木下が突っ込む。

「そんなに先を急ぐなよ。前置きは長くなるって言っただろ……」

2

バリケードは一つじゃなかった。というのも、学生運動は当時いくつものセクトに分裂してて、それぞれの主張を絶対に譲らないからな、その思想的な分裂がバリケードのなわばりの線引きとして現れていたってわけだ。理学部はP派、文学部はQ派って感じだ。

このセクト闘争ってのは熾烈でね、他の大学じゃ、死人も出てた。だから俺たちは、警察とか機動隊とかより、他の派の襲撃を恐れてたね。俺は臆病だったから夜はほとんどバリケードから出なかった。昼間にはデモとかに参加するけどいちばん安全なところでウロチョロしてるだけ。言うことは革命だとかゲバルトだとか過激なんだけどな。ま、卑怯もんさ。

それで、俺たちのバリケードの中は男ばっかりだったんだけど、隣の文学部の、Q派のバリケードには女がいたんだ。一人だけ。でも、たった一人でも女がいると雰囲気が違うんだな、なんとなく男たちがサッパリとあか抜けてるんだよ。当時の大学自体、女は数えるほどしかいなかったし、とにかくひと目でいいからバリケードの中の女とやらを見てみたかった。

「やめとけ」

当時の親友だった遠山ってヤツが言った。

「ありゃバケモンだ」

「ブスなのか？」

「とんでもない。人間離れした美人だよ」

「だったら……」

「陰ではメドゥーサって呼ばれてる。あのギリシャ神話のな」

「ひと目見たら石になるのか？」

「なる」

「アレが、の間違いじゃないのか？」

「俺は冗談は言ってない。見ろよ、Q派の男たちを。すっかり精気を抜かれてしまってるだろ。あれはメドゥーサに魂を食われてしま

ったからさ」

3

「課長はそのメドゥーサを見たんですか？」

木下明美が俺の目をのぞき込むように言った。

「見たよ」

「美人？」

「ゾッとするほどのね」

「女優で言えば？」

名も知らぬ若いヤツが言った。

「いや、こういう言い方では信じてもらえんだろうが、誰にも似てないんだ。一言で言えば、抽象的な美人なんだな。あんな女はあの女ひとりで、たぶん世界中どこにもいない」

「そのメドゥーサが、課長の最初の……」

「さあ、どうだろうな。それはこれからのお楽しみってとこだ。でもあれが俺にとっての最初どころか、たぶん、最後の女だ」

ちょっと雰囲気が凍った。

「そんなによかったんスか？」

さっきの若いヤツ。

俺は水割りを舐めてから、

「セックスって、いいものなのか？」

ちょっとした笑いが起こった。みんな若いのだ。セックスの恐ろしさなどまだ知るまい。と言っても、俺があの女とやったのはこいつらの誰よりも若かったころだったな。

「その人とたくさん、したんですか？」

木下が怪訝そうに言った。

「いや、一度だけだよ。それでじゅうぶんだ」

4

遠山はよく俺をストリップに誘った。バリケードの中だけじゃだ

めだ、生き生きとした大衆の姿を見ておくんだ、なんて言ってな。ストリップが女性差別じゃないか、なんて意識はなかったね。そこにいるオッサンらと連帯してるような気分さ。でも飽きてくるんだな、オバサンの裸に。自分の母親よりも年上のオバサンのストリップだぜ、欲情するわけがない。といっても、遠山はじゅうぶん満足してるみたいだったから、俺が淡泊だったってだけかも知れん。

「おい、今晩、連帯しにいこう」

これが遠山のストリップへのお誘いだった。

「もういい、飽きた」

「連帯に飽きるも糞もないだろ」

「金ももったいないし」

「そうか。じゃ、俺がおごるから、ちょっと変わったところに行かないか」

「変わったとこ？」

「ああ」

「なんだよ、それ」

「…ＳＭクラブ…俺もまだ行ったことはないけど、ストリップの支配人が紹介してくれた会員制のクラブなんだ…すごいらしいぜ」

その夜、確かにすごかった。そしてなにより、

「女が若いな」

遠山が言った。

「うん」

本当に若かった。年寄りの裸を見慣れた目にはそれだけでも新鮮だった。

サド役、マゾ役、どちらも仮面を被ってたんだが、革の下着だけの体だし、隠し切れん若さがあったよ、そこには。

客はと言えば身成のいい中年過ぎの男ばっかり。若い女連れも数組いたな。ストリップとはまるで客層が違う。

「ブルジョアの店だ」

少し興奮して来た俺は照れ隠しに遠山に言った。

「ああ、だが、ブルジョアの退廃を見ておくのもいいだろう」
遠山は俺を見もせず放心した表情で言った。
足指舐め、鞭打ち、蝋燭、とショーは続き、司会者は、
「ご開帳！」
サド役の女はマゾ役の女の仮面を取った。
「これが今日のＰＩＰＩ姫です！」
司会者の紹介に拍手が起こった。長い髪が陰になってよく見えないものの、マゾ役の女が相当の美人だということはわかった。
美人だな、とでも言おうと遠山の方を見ると、まさに石になっていた。
そしてつぶやいた。
「あれは……」
「なんだよ」
「あいつは……」
「だから、なんだよ」
「メドゥーサ……」

5

「どんなショーだったんです？」
俺が意図的に避けようとした話題へと、木下明美が切り込んだ。
「ちょっとな、女と飲みながら言うような内容じゃない」
「でも、しらふじゃ、なお駄目っしょ」
隣の課の若いヤツ。
「まあな。じゃ、フランス語でＰＩＰＩって何かわかるか？　だれか」
だれもわからない。
「小便だ」
「うわっ！　聞きたくないな、それ」
名も知らぬ若い女の子。
「私は聞きたい」

木下の目はむしろ輝いている。
「じゃ、ショーの内容はそのうち、木下くんにだけ話すよ」
俺は話を続けた。

6

ショーを観て、遠山の何かが崩れた。目は遠くにあって、帰り道で何を聞いても答えなかった。本当に石になってしまったようだった。
でも俺は一応聞いたよ。
「バリケードに戻るか？」
「いや、今日は家に帰る」
それが遠山を観た最後だった。

7

「え～」
木下明美が声を上げた。
「ショックで大学辞めたとか、ですか？」
「違うよ。死んだんだ」
「病気とか？」
「いや、殺されたんだ。犯人はまだ捕まってないが」
また雰囲気が凍った。
「ごめん、話がなんか、妙な方向に行ってるな……」
「いや、いいっスよ」
隣の課の若いヤツ。
「サスペンスもいいじゃないっスか」
「すまんが、サスペンスなんかじゃないよ。そんなもんじゃない」

8

遠山は俺よりも、もっと、さらに、いい加減なやつだったから、何日もバリケードにやってこないこともめずらしくなかったんだ。

そこにいなくても誰も心配なんかしてなかった。だから、全身めった打ちにされて少なくとも8カ所骨折、頭にはバールが打ち込まれて先ほど息絶えたって言われても、ほんと、耳を疑うだけで、なんで遠山がって、な。もっと大物ならともかく、あんな下っ端の、ストリップ狂いの男をなんでゲバるんだよって感じだな。病院で対面したときも、俺は涙も出なかった。警察に出頭するように言われたけど、任意だから拒否したよ。そういう時代だったんだ。

それにしても、バールを脳天に打ち込んでトドメを刺すのはメドゥーサのいたQ派のやり口なんだ。俺はあの夜のショーと遠山の死とを結びつけて、恐ろしさに震えたよ。メドゥーサの正体を知られたQ派に消されたに違いないってね。

ただ、震えてばかりもいられなかった。学長交渉が決裂して、今日明日にも機動隊が学内に入るって話だった。君たちには信じられんだろうが、機動隊と殴り合うことが俺たちの革命運動だったんだ。殴り合えば殴り合うほど革命は近づくんだってな。もちろん俺は直接殴り合ったことはないよ。でもあの夜は、ついにその日が来るんだって、俺はメドゥーサのことも遠山のことも忘れて、バリケードの中で、徹夜で、革命後の理想社会について仲間たちと議論してたよ。

朝九時、ちょうど九時だったな。機動隊の突入が始まった。「死守！」するはずの入り口のバリケードなんかもろいもんさ。四、五人引っ立てられて終わり。あとは死にものぐるいに逃げるだけさ。俺？　俺は突入されたとほぼ同時にもう逃げてたよ。前から探しておいた逃げ道をね。二階の窓から雨樋につかまり降りて、すたこらさっさ、とね。

ところが、地面に降りて、俺はそのまま石になった。

メドゥーサ……

俺を待ち伏せするかのように、そこに立ってたんだ。あの夜と同じ、大理石のような青白い顔で。

9

「それで、やったんですね」

気の早い木下明美だ。

「おいおい、なんでそうなる」

「だって、そうじゃないとこれまでのお話が……」

「確かにやった。ただしメドゥーサとじゃない」

10

メドゥーサは俺の手を引いて走った。石のように冷たい手がさらに冷たく汗ばんできた。

手を引かれるがまま、裏口を駆け抜けた。

俺たちは無言のまま同じ電車に乗り、怪しげな駅で降り、怪しげな宿に飛び込んだ。もうそうするしかないと決まっていたんだ。きっと何億年も昔から。

年中陰になってるような、昼間でも暗い部屋だった。そこをさらにカーテンで暗くした。時計も見えない暗闇だった。その中で俺たちは時間も忘れてひたすらやった。

俺は初めてだったが、向こうは違った。

手慣れていた。

俺の全てを、俺以上に知っていた。

俺は舐められ、吸われ、噛まれ、ひりつくような快楽の中で、しかも果てることさえ許されず、地獄のような極楽と、極楽のような地獄を彷徨い続けた。

そして最後、俺を一滴残らず吸い取って満足すると、あいつはカビ臭い息を俺に吐きかけた。

食われる！

俺は直感的に思った。

これはメドゥーサじゃない！

手探りで灯りをつけた。

俺の上にまたがっていたのは、骨と皮だけのくせに腹だけをボッ

コリ膨らませた地獄の餓鬼そのものだった。
灯りが点くと、そいつはかすれた叫び声をあげながら、ノソノソとどこかへ逃げていった。

11

「誰だったんですか」
また木下明美、顔は蒼白になっている。
「わからない。顔は見てないんだ」
「メドゥーサは？」
「消えた。バリケードは解除されたし、あのＳＭクラブにも行ってみたけど、もう無くなってた」
「私、聞いたことがある」
ずっと黙って聞いていた受付の女の子が初めて口を開いた。
「男の人はいつも幻影を抱いてるんだって。現実の女を抱いていても、本当に抱いているのは幻影なの。それは政治だったり、野望だったり。でも、目を開けてみる幻影は醜い現実でしかなくて、だから男は目を閉じて幻影を抱き続けるの。でも幻影を抱き続けた男はそのうち現実の女に食われてしまう」
明るい顔に戻った木下が、
「じゃ、課長、次を指名して」
そう言って笑った。
（『妖女伝』第一章「メドゥーサ」終わり）

金魚

プロローグ

金魚すくいってなんだか残酷だと思いませんか。ううん、金魚にとってじゃないの。人間にとって。だって、すくった後、持って帰るでしょ、そのあとずっと金魚の世話が待ってるわけじゃないですか。これって結局は金魚のエサ係でしょ。

もちろん金魚なんて、ほったらかしにして水槽の水が真緑になっても、逆にそうなったら、エサなんかやらなくても一年くらいは生きてるような魚です。だから、エサ係なんて言い方はどうかと思うけど、それはもう気の持ちようですね。

私は金魚のエサ係だったし、それはそれでよかったんです。近所の臭い臭いドブから糸ミミズをとってきて、さっと洗って水槽に落とすとね、もう待ちきれないって感じで水面まで揚がってきて、パクッ、と。徐々に沈んでいく残りのミミズだって、いつもの金魚だったら見せないような俊敏な動きで、ヒラリ、パクッ、ヒラリ、パクッ、ヒラリ、パクッって。これは見ていて爽快なんです。だからドブに網を突っ込むエサ捕りは苦痛でしかなかったけど、やめられないの。人工のエサじゃ、ここまで飛びついてくれないから。それに、食べ残すでしょ、人工のエサだと。その処理も大変ですからね。

1

高校の頃、ものすごくいじめられてた男の子がいたのよ。遠山って子でね、私が気づいたときはもうかなりイジメもエスカレートしてて、ある時ね、美人の若い先生の授業の前、教壇の上に白い布きれが置かれてたの。教壇に立った先生、思わず手に取るじゃない、それがブリーフなのよ。で、遠山君の名前が書いてるってわけ。

先生もバカじゃないから、その時間、白い紙をみんなに配って、イジメについて知ってることを何でもいいから書けってことになっ

たのね。私は何にも知らなかったから、知りませんって書いただけ。でもみんなはかなりディープなところまで知ってたみたい。放課後、イジメグループが呼び出されて、今度いじめたら停学だってことになったらしいの。

で、週明けね、友達の女の子が、

「昨日、すごいことになったらしいわよ」

「なにが？」

「トーヤマのことよ」

「遠山君がどうかしたの？」

「いじめがばれたじゃない、で、リンチされたんだって。男子みんなに」

ふ～ん、って答えただけ。だってそんなことに関心ないし、あの大人しくてちょっと上品なところのある遠山君には同情だってしてたから。

「それが、すごいのよ」

友達は私にかまわず続けた。

2

誰がばらしたんだってことになって、犯人探しがはじまったのね。クラスの男子全員、いじめの共犯者と言えば共犯者なんだから、名指しされた三人としては腹がおさまらないわけじゃない。それでクラスの男子全員、ブラスバンドの練習室に集めたんだって。ブラバンなんて十年以上も前に廃部でしょ、あそこなら人も来ないだろうって。

それでトーヤマにパンツを脱がせて……。

え？　そんな驚くようなことじゃないでしょ。いじめの定番じゃない。

で、そこにいた男子生徒を出席番号順に並ばせて、下の毛をね、むしらせたんだって。むしった毛は量がわかるように紙の上に置くの。それが少ないとトーヤマに同情した、って言われるもんだから、

みんなかなり必死にむしったんだって。
殴る蹴るだと証拠が残るでしょ。これって証拠は残っても人にはちょっと言えないからね。男子も残酷よね。でもこれでみんなが本当の共犯者でしょ、誰も告げ口しなくなったから、これからもっといじめられるわよ、トーヤマ。

3

「男子って、女子がばらしたって発想はしないの？」
「別に犯人探しはどうだっていいんでしょ、トーヤマをイジメれば、それで」
友達はそれでイジメの話を打ち切って、また他の噂を始めた。私は上の空で聞きながら、ふと遠山君の方を見ると、チラ、と、だけれど目が合った。
私を見ていた。
何かどきどきした。
イジメの噂をしていたのが聞かれたのかも知れない。いやそんなはずはない。ここから私たちのひそひそ声が聞こえるわけがない。
なんだかいろんな事を考え、考え、次の授業はまったく耳に入らなかった。

4

だから、まあ、予兆はあったとは言えるのね。目の合うことは再々だし、放課後なんか、遠山君が私に何かを渡そうとして躊躇したような感じのこともあったから。
大げさに驚く必要もなかったのよ。
たかが、靴箱の手紙くらいで。

あなたのことが気になってしかたがありません
好きです。
一度ゆっくりお話ししたいのです。遠山

この衝撃をなんて言ったらいいんだろう。もう、それこそ、天が落ちてきたような。いや、これでも足りないな。私たちの宇宙がね、もの凄い速さで隣の宇宙に衝突して、これまでの世界が全てバラバラになっちゃったような、それでも私だけは生きていて、そのバラバラになった世界を見ているような。

とにかく世界が変わっちゃったのよ。

だって、ね、私は一生、恋愛とは縁がないと思ってたわけですよ、あなた。

この顔だし。

5

ママはもの凄い美人なのに、なんで私がこんななんだろう。

といって、ママに似てないわけじゃないのね。そっくりなの。造作の一つ一つは似てると思うのに、それでもね、なんでこうも違うんだろうって言うくらい、違うのよ。

福笑いってあるじゃない。目隠しして顔の造作を並べるヤツ。だから、あれと一緒ね、きちんと並んでたら美人なんだろうけど、何かちがうのね、どこがとは言えない、とにかく、美人そっくりのブスなのよ。美人そっくりなものだから、逆にブスが引き立つのね。

小さい頃からそれはもうわかってた。大人のひそひそ話は全部聞こえてたし、あれはおばあちゃんが死んだときの法事で、酔った叔父さんが私の顔を両手でもちあげてマジマジと眺めながら、

「なんでこうなるのかね」

なんて言ったこともあったから。

ママはママで、

「男を頼りにしちゃだめよ、強くなりなさい。一人で生きていけるように」

とか言って小学校に入るなり空手と柔道に通わせるし。

女の子はフツーだったらピアノとか習うものなのに。

でもママの気持ちはわかる。
お見合いで結婚して、ハネムーンから帰ってきた翌日に交通事故で夫が死ぬなんて、そうある事じゃないけど、でもママの身には現実に起こってしまった。以来、お父さんの家をたよりに身を潜めるようにして生きてきた。おばあちゃんが倒れてからは介護のこととかで追いつめられて、ずっと安定剤を飲んでたのも知ってる。ママは女の弱さを知り尽くしていたんだと思う。私を強い女にしたい気持ちも痛いくらいわかる。だから私は頑張った。空手も、柔道も、勉強も。男に負けないように頑張った。

6

私にとって男は打ち負かすライバルではあっても、決して恋愛の相手じゃなかった。初恋も小学校六年の頃、同級生の女の子だった。向こうはふざけたキスだったんだろうけど、私はあれが真剣なファースト・キスだと思ってる。
それ以来、醒めてた。もう人を好きになることなんかないと思ってたし、ましてや男なんか！　柔道場や空手道場で毎日ぶつかり合ってるあの汗くさい肉のかたまりに恋なんてするわけがない、と思ってた。
でも遠山君は違ってたのよ。私よりも背が低くて、細くて、上品で、だからイジメられてたのかもしれないけど、これまで知ってるどんな男とも違ってたのね。守ってあげたいタイプかな。

私も会ってお話ししたいです。
どこがいいですか。

なんて返事を書いたわけ。震える手で。
もう、この返事への返事が来るまでの数時間の長かったこと！

日曜日に午後1時、ブラバンの廃部屋で。

ここで気づくべきだったのね。
自分があんなリンチを受けた部屋に呼び出すなんて、こんな無粋なこと、あるわけがない。
でも私は舞い上がってたから気づかなかった。
土曜の夜、母の目を盗んで、一生縁がないだろうと思っていたルージュを、鏡を見ながらそっと引いてみた。上手く引けるわけもない赤い線が、それでも私の顔に華やいだ雰囲気を与えてくれた。
笑ってみた。
別人のようだと思った。
思えば鏡の前で笑うことなんか、ここ数年なかった。鏡は私にとって苦痛を与える道具でしかなかったから、いつのまにか鏡を見るのを避けてたのかも知れない。

7

で、当日。
ほこりっぽい部屋に一人で立って待ってたわ、遠山君。
私を見るなり泣き出したの。
……辛かったんだ……
私は切なさにもらい泣きした。
この人の辛さは私の辛さだ。
私はこれからこの人の痛みを自分の痛みとして生きていこう。
そういう想いがあふれ出て、私は何か聖母にでもなったような、おおらかな気持ちに包まれたのね。
でもどうしていいかわからない。
遠山君は歩み寄ってくるし。
手を私の肩にかけるし。
抱きついてくるし。
……ちょっと、いきなりこれはないんじゃない……
おまけに唇を突き出してくるし。

8

変だ、と思うと、さっきからの控え室の物音が気になった。
私は遠山君をそっと押しのけると、控え室の方を向いた。
バーン、とドアが開き、例のイジメグループの三人が飛び出してきた。
飛び出して来るなり、ホコリだらけの床に笑い転げた。
私は全てを悟り、頭の混乱を鎮めようとした。
「ほら、お前が選んだんだろ、犬の糞と、世界一のブスと、どっちにキスするか」
そういって三人はしつこいくらい、床を転げながら笑い続けた。
笑い転げながら、やっとリーダー格の男子が言った。
「やっぱりおまえ一人じゃ無理か、よし」
三人は立ち上がり、二人が私の腕を掴もうと両側から迫ってきた。
あと一人は遠山君の背中を押している。
「大人しくしてろよ、ドブス」
私はやっと混乱した頭を収拾することが出来た。
怒りに我を忘れることもなかった。

9

何が起こったのか、私以外の誰も気づいてはいないだろう。三人は床に転げ、丸くなって身動きすることさえ出来ず、ただうめき声を上げていた。
初めて男の急所を蹴った。
ブニャッとした、拍子抜けするような感触。
手加減したのに、もの凄い効果だ。
私はリーダー格の、ケンカだけはやたら強いという男の喉をさらに蹴り上げた。仰向きにぶっ倒れ、もういちど丸くなり、血を吐いた。もちろん手加減はしていたけれど、食道かどこかの血管を切ったのだろう。かなりの出血だ。

「てめぇ」
これだけ血を吐いて、それでもまだ力関係の理解できぬバカ丸出しの目でこちらを見る。
どうしょうもないね。
今度はあごを蹴り上げ、仰向けざまになったところで、みぞおちにカカト、一瞬、ネジる。こいつは詰まった水道のような音を立てて胃液を吐き、咳き込みながらうずくまる。喉の奥の傷に新鮮な胃液がしみて、地獄のように痛かろうよ。ザマァみやがれ。
でもあんたって、ほんとにバカだね、涙目でウオォーと立ち上がったところで隙だらけ。
膝をハラうと、ドターッと、今度もまた受け身もとれずに後頭部からブッ倒れる。
イヤだったけど、こいつの股ぐらを掴んでやった。
力をこめて、グイッとね。
「ひとつ潰すよ。文句なんか言うなよ」
グイッと。
「た、助けてくれ」
「もう遅いよ」
タマの一つを探り当て、絞るように力を入れた。
「ぐおぉー」
うめきながら、こいつ、漏らし始めた。小だけじゃなく、大も。
ああもう、汚くて、臭くて、やる気をなくす。
ひいぃなんて泣き始めてるし。
後の二人は問題外の外。凍りついた目で私を見ている。
泣きじゃくるリーダー格を解放して遠山君の顔を見ると、怯えっきった表情になんだか猛烈な怒りがこみ上げてきた。
おしっこで汚れた手で頬をはり倒し、その制服で手を拭いた。
「四人ともそこに正座しな」
こうして私には四人の奴隷が仕えることになった。

１０

イジメグループの三人は、つきあってみれば、バカなだけの素直な男の子だった。遠山は……どういう人間なのか今になってもわからない。人間だったのかさえ。三人組は遠山が怖かったんだとやっとわかった。

で、それから一月くらいたったあるとき、三人組とデパートでウロチョロしてて、元リーダーと二人でいるところをママに見られてしまった。

型どおりに挨拶した後、元リーダーは、

「すげえイイ女ですね。いえ、アネさんにそっくりなんですが」

などと私と見比べながら言った。

その夜、

「あの男の子、誰？」

聞かれるだろうとは思ってた。小さい頃から、男との付き合いは気をつけろだの何だのと、五月蠅く言われ続けてたから。そりゃ、ママくらい美人なら気をつけなくちゃいけないんだろうけど、この私ですよ。少々虫が付いたくらい、喜んでくれてもいいんじゃないの。

そんな気持ちもあって、

「カレよ」

ママがうろたえる様を期待したのに、

「じゃ、今度、家につれていらっしゃいよ。土曜日の午後なんかどう？　お茶とケーキ用意しとくから」

上品に微笑まれて、ちょっと気合いぬけしてしまった。

１１

で、土曜日、元リーダーはママに食われてしまったってわけ。

私は、細く開けた障子の向こうで、ママの舌と唇が元リーダーのからだをまるで金魚のように泳ぐのを眺めてた。ヒラヒラと、あるいはゆるゆると、金魚は自由自在にそのヒレを泳がせながら、上へ

下へ、右へ左へ、エサを求めてさまよった。そしていつの間にか二匹になった金魚は交互に元リーダーを飲み込んで、私はその自在さと美しさに見とれたわ。でも、苦痛とも快楽とも知れぬ声を、元リーダーだけじゃなく、ママまでもがあげていたのがちょっとイヤだった。こういうときこそ、ママには楚々としていて欲しかったのに。

最後の一滴が金魚の中に消えたとき、元リーダーの姿はどこにもなかった。

ママは静かに居住まいを正し、頬に貼りつく髪を耳にそっとかき上げながら、

「駄目よ、のぞき見なんかしちゃ」

元リーダーは跡形もなく消えた。もちろん、みんなの記憶からも。だから誰も騒がなかった。

12

翌週の土曜日、イジメグループの残りの二人はいちどに食われた。あちらと思えばまたこちら。

自由自在に二つの体を泳ぐ金魚に翻弄されながら、この二人は消えてしまった。私の記憶の中にだけ、その姿を残して。

その夜、

「私ね、生まれて初めて食事をしてる気がするのよ」

ママは言った。

「だって、お見合いで結婚するまで、男の方とおつきあいするなんてとんでもなかったし、パパはすぐに死んじゃったでしょ、ね……だから」

毎週、エサを運んで欲しいのね。

私は潤んだママの目に、

……わかったわよ。ドブをさらって新鮮なエサを捕ってくりゃいいんでしょ……

無言でそう返事した。

「お願いよ」
ママは金魚のような唇を赤いヒレのような舌で湿して、いたずらっぽく笑った。

13

一月後、クラスの男子は遠山ひとりを残して消えた。
遠山はエサとして何か問題がありそうなんで、やめてたの。
この予感は的中したんだけど。
で、一年経つうちに学校中の男子が遠山以外、全部消えてしまって、こいつを食わせたらもう女子校になるんじゃないかって瀬戸際、街でいかにも胡散臭そうな男に呼び止められた。
「お嬢さん、すごくカワイイねぇ。ねえ、お茶しない？　一時間五千円あげるからさぁ」
これまで、街で声をかけられたことなんか一度もなかったのに。
「ね、ね、じゃ、七千円あげるよ、七千円、ね、カワイイお嬢さん」
カワイイなんて言葉、かけてもらったの初めてよ。
「もう、一万円出しちゃお、一万円。お茶飲むだけだよ、一万円」
だからお礼に、ムゲに突っぱねたりしなかった。振り返りざま、
「三万円！」
男はびっくりして私の顔を眺めたわ。私は、
「三万円よ。でも、もちろん、お茶だけじゃないのよ。あなたを骨まで食べてあげるから」
ママがよくやるように、唇を舌で湿すフリをしてみせると、
「ど、どこに行こう、ホ、ホ、ホ、ホネ、ホネ、ホテ、ホテ」
「ううん、ウチがいいな。そのほうが落ち着くから。一緒に来て」
これならドブさらいより簡単でお小遣い稼ぎにもなるし、イケルと思ったのに、ママったら、
「ああ、マズい、マズいわ、こんなの、とてもマズくて食べられたもんじゃない」
なんて半分以上食べ残すから、カケラの掃除が大変だった。

ほんとに、お手軽なのは駄目なのね。
反省。
「同級生はど～したのよ？　あと一人、いたはずだよ？」
「いるにはいるけど」
「な～んなのよ」
「あの子はちょっと……」
「い～いじゃないそんなの気にしなくてもっ！　お茶とケーキの用意ぐらいしとくから、土曜の午後、家に呼びな」
血のように真っ赤な舌がねったりと、真っ赤に歪んだ唇を舐めた。
生き餌の味を知ったママはもう、昔のママじゃなかった。

14

次の日、私が誘う前に、遠山は自分から私の席の前にやってきた。
「誰も気づいてないと思ってるだろ」
「何が？」
「男子をみんな金魚に食わせたろ」
私はギクッとして、
「何言ってるの？　あなた正気？」
「正気かどうか、自分の胸に聞くんだな」
昔の遠山君じゃなかった。
いなくなった男たちの男エキスを全部集めたほどに男らしくなっていた。
「オレが変わったと思ってるだろ」
その通りだったけど、返事できない。
「変わったのはオレじゃない、お前だ」
「私？」
「そうだ。それに、言っておくが、オレは食われやしない。君の金魚なんかにはね」
そうかも知れないと思ったけど、
「じゃ、試してごらんになる？」

私は負け惜しみで言った。

15

土曜日、遠山はうちの家にやってきた。そしてリビングでママと対面するなり、制服の内ポケットから鏡を出して私に突きつけた。遠山の手の中の折りたたみの鏡は見る間にパタパタと広がり、半畳ほどの姿見に化けた。

「これが今の君だ」

ママ！

そう、ママが、若くてきれいなママがそこにいた。

いや、ママじゃない！　これは私だ。

何かが変わって見違えるようになった私だ！

私はママと目を見合わせた。

そしてギョッとした。

この人はママじゃない！　歳をとった私だ。

いや違う、ママだ！　何かが変わってしまったママだ！

「これが本当のあんただよ、ほれ」

姿見を遠山に突きつけられたママは、ヒィィーと叫びながら鏡の中に吸い込まれた。遠山はさっきと反対の手順で鏡をパタパタと畳み、手帳ぐらいの大きさにすると、それを金魚鉢に投げ入れた。

ごぼごぼごぼ、ごぼごぼ、ごぼ　ご……

ママの溺れる音が静かに消えた。

「君のママは死んだ。君の呪いも解けた。君は君だ。じゃあ食わせてもらおうか」

「ようございます。でも、私にもあなたを……」

「食うか」

「ええ、いただきたいの」

私たちは身を身でむさぼる至福の時を過ごしつつ、金魚鉢にママの死体がポッカリと浮かぶのを眺めながら、互いに互いを食い尽くして消えたのでございます。

エピローグ

高校は女子校でした。

私は小さい頃から習っていたピアノのおかげでブラスバンドの指揮者でした。

クラスにいた男たちのことも、もうすっかり忘れてしまったようです。

ママ、私のママ、安らかに眠ってね。

お父さんは庭に小さな墓標をたててくれながら、

「アジやサンマだったらこんなことしねえよな」

なんていい、お母さんに

「お父さん、なんてこと言うの！」

ってたしなめられてます。

墓標には「ママ」って、金魚の名前が書かれてありました、とさ。

（『妖女伝』第二話「金魚」終わり）

ヒミコ

僕の故郷の話です。

街から少し外れたところに城山という小さな丘があり、その丘に登る鬱蒼とした道の山肌には、洞窟と呼ぶにはあまりにもちゃちな、コの字の横穴がいくつも開いてありました。どこに続くわけでもない、入ったらすぐに隣の穴に出てしまう横穴は、子供心にもなぜ掘られたのか不思議でした。実はもともとこの丘全体が古墳というか、お墓として利用されていたもので、横穴は古代の墓穴だったのです。

昔この丘に城を築くための工事中、当時は石で蓋のされていた横穴すべてから人骨がゴソッと出てきて、それらの骨は別の場所に埋葬しなおされたという話です。でも子どもの頃の僕はなにも知らず、この横穴で隠れん坊などの無邪気な遊びを繰り返していたのでした。じっさい、穴は全然、墓穴らしくなかったから。

と言うのも、この横穴は、前の戦争中、防空壕としても利用され、その際に、入り口も中も削られてかなり広く明るくなっていたのです。中の空間を広げるために削ったのでしょうが、これで墓穴の彩色はすべて失われてしまい、そこは何か無色透明な、ただのトンネルみたいになってしまっていたのでした。

小学生だった僕はその城山の下にあった公園で、毎日、毎日、遊びました。いつも一緒にいたのは、サンちゃん、チンちゃん、セイちゃん、コウちゃん、ブーちゃん。日によっては人数が増えたり減ったり。たまには縄跳びの得意な女の子のモモちゃんも混じることもあり、そんなときは、ちょっとだけ、僕らの遊び時間が華やいだものでした。

ある夏の日でした。

いつものように僕らは公園に集まり、そしてその日は城山の探検に行くことにしたのです。今日は全部の洞窟を制覇してやろう、と。子どもにとって、どれほどちゃちでも、あの横穴は洞窟以外のなに

ものでもありませんでした。
おもちゃの懐中電灯が二つありました。
大人の使う懐中電灯なら、洞窟の入り口から奥の壁にまで、まっすぐに光が届いていたのでしょうが、子どもの小さいおもちゃは足元しか照らすことが出来ません。珍しくフル・メンバーの七人がそろったその日、隊長のブーちゃんが先頭で一個、中程で女の子のモモちゃんがもう一個、それぞれ懐中電灯で足元を照らしていました。
小さい洞窟です。最後の一人が穴から入るころには、先頭はもう出口近くまで来ています。そんなちゃちな洞窟でも、それでも奥に入ってしまえば一瞬はほとんど暗闇の世界で、この世ならぬ感じがしたものです。
洞窟が全部で幾つあるのか数えることもなく、丘の道を登りながら、最後の穴を僕らはくぐり終えました。
そして、ふと気づいたのでした。
――サンちゃんがいない。
「サンちゃーん」
僕らは叫びながら丘を駆け下り、公園まで戻りました。
もちろん、公園にもいません。
となれば、洞窟に隠れているに違いない。
僕らはもう一度、ひとつひとつの洞窟をくぐりサンちゃんに呼びかけながら丘を登って行ったのです。そして最後の洞窟にもサンちゃんが居ないことがわかり、誰かが、
「チンちゃんもいないよ」
けれどそれだけじゃありません。
「セイちゃんもいない」
「コウちゃんも」
「ブーちゃんも」
僕らは顔を見合わせ、そして奇妙なことに気づいたのです。
ちゃんと七人いる。
しかも、そこにいるのはみなよく知っている友達ばかりで、誰が

どう入れ替わったのか、さっぱりわからないのです。
男六人、女一人の七人の、数だけはそろっていたのでした。
モモちゃんと入れ替わったのは、よく知っていた女の子でした。
でも、その子のことはよく知っていたのに、名前も、歳も知らないのでした。顔にも覚えがなく、ただ、まえからよく知っていて、今日も最初から一緒に遊んでいたという記憶だけがあるのです。他の男の子も同じです。よく知っているのに名前も知らず、ただ知っているという記憶だけがあるのでした。
そしてふと気づきました。
僕自身が何者なのか、名前すら知らないと言うことに。
ここにいる七人で遊んでいたことは確かなのに、洞窟をくぐり、丘に登るうち、何かが変わってしまったのです。ここにいる七人じゃない七人が遊んでいたはずが、いつの間にか、ここにいる七人になってしまった。
僕らは恐怖に泣きながら、それぞれの家に駆けていきたかった。でも家がどこなのか、いやそもそも、僕らに家があったのかさえ、わからなくなってしまっていたのです。
とりあえず丘を降りよう、とした僕らは、洞窟がすべて岩でふさがれていることに気づきました。丘の様子も違っていました。
丘の道に立ちつくしていた僕らはすぐに工事のお役人たちに見つかり、番所へと引き立てられて行きました。
「子どもが七人、狐にばかされたか？」
僕らの話すことがあまりにも支離滅裂で、また要領を得ないので、お役人たちは困っているようでした。
一人がまた聞いてきました。
「お前たちは確かに穴に入ったのじゃな」
僕らは口々に、
「洞窟に入った。みんなで入った」
「それで、出てきたら、朋輩が消えていたのじゃな」
「居なくなったの、みんな」

「誰が消えたのか、一人ずつ名を言うて見い」
僕らはみんなの名前も忘れてしまっていました。
「七人で入ったのじゃったな」
「うん」
「今ここに何人いる」
「七人」
「誰が居なくなったんじゃ」
「みんな」
お役人は困り果てたような顔をして、
「穴の中は暗くなかったか」
「暗かった、けど」
僕らは何かで足元を照らしていたはずでした。何かこう、それほど明るくはないけど、あると安心するような、何というのか、あれです、あれ……
「火を持って入ったのか？」
「ちがう」
「じゃあ真っ暗か」
「ちがう」
あまりにも無駄な問答に、お役人はまた仲間のところに戻り、つぶやきました。
「祟りか……」
そして和尚さんや小僧さんに混じって数日を過ごすうち、別に僕らが誰であってもかまわないし、そもそも僕らにとって、僕らが誰であるのかなんて、何の意味があるんだろうとさえ思えてきたのです。
「城山はもともと、上代の豪族の墓だと言われておる」
和尚さんが言いました。
「岩で閉じられておる穴は、みな、墓穴で、豪族の首領の代替わりごとに掘られたとの言い伝えもある。お前らはその穴に入り、出てきたと言うが……」

「憶えておりません」
僕らはもう、穴に入ったのかどうかさえ、あやふやでした。
「築城を始めた途端にこのような……瑞兆か凶兆か」
ある日、和尚は呼ばれて築城の現場へと行きました。横穴をふさぐ岩を取り除いたところ、中には朽ちた木棺と人骨があったというのです。お役人たちは和尚に経をあげさせて、新しく作った塚に骨を埋葬しなおそうとしたのでした。
ところが、和尚は経を上げることができませんでした。和尚が横穴の前に立った途端、穴の奥から飛び出てきた矛に、ひと突きにされてしまったのです。続いて横穴全てからゾロゾロと出てきた兵たちに、そこにいたお役人たちは皆殺しにされてしまいました。太平に慣れたお侍では、上代の大乱に慣れた兵にかなうわけがなかったのでしょう。
「兵が、来るわ」
僕らと一緒にお寺に預けられていた女の子は言いました。
「兵？」
「マツロの、イトの、ヤマトの兵よ。たくさん、たくさんよ」
僕らはキョトンとした顔を見合わせました。
けれど、表からは、確かに何か不気味な大軍の足音が聞こえてきていました。
「どこかに隠れなきゃ、私、ヒミコにされてしまう」
せっぱ詰まった様子に、
「じゃあ本尊の裏に」
女の子とふたりで隠れたとき、兵たちの足音が寺の中に入ってきました。
「モモソヒメ！」
「トトビモモソヒメ！」
兵たちは口々に叫び、ついにお堂にまであがってきたのでした。
ふと横の女の子を見ると、モモちゃんでした。モモちゃんは僕を見てにっこりと笑い、

「大丈夫よ。あとで迎えに来てね、きっとよ。待ってるからね」
そう言って、堂々たる足取りで兵たちの前に歩み出て行きました。
兵の一人が尋ねました。
「トトビモモソヒメにて、ありやぁ」
「そは吾ぞ」
それを聞くと、兵たちは二本の長い竹をお堂の床に並べました。
モモちゃんは良く通る高い声で歌い始めました。
おさかの　おおむろやに　ひとさわに　きいりおり　ひとさわに
いおりとも
みつみつし　くめのこが　くぶつつい　いしつついもち　うちて
しやまん
みつみつし　くめのこが　くぶつつい　いしつついもち　いまう
たばよろし
……
兵たちはモモちゃんの歌に手と足で拍子を取りながら、そのうちの二人が床に置いた二本の竹を交互に持ち上げたり、床に叩きつけたりを繰り返し、そしてモモちゃんは、そこに踊るようにして近づくと、二本の竹をスイッとまたいだのでした。モモちゃんは生き物のように横へ縦へと動く竹をとても上手に避けながら、ある時は踊りのように、あるときは縄跳びのように、跳ね続け、飛び続け、良く通る高い声で歌い続けました。モモちゃんに唱和する兵たちの声、また拍子を取って床に打ち付けられる矛の柄の音が一つになって、お堂の中は割れるような轟音に満ちました。
……
たたなめて　いさなのやまの　このまよも　いいきまもらい　たたかえば
われはやえぬ　しまつとり　うかいがとも　いますけにこね
……
延々と続く歌がやっと終わると、兵の一人が、うやうやしく、丸い鏡と矛をモモちゃんに渡しました。モモちゃんはひもの付いた鏡

を首にかけ、矛を高々と突き上げて、
「いざ子ども、吾はヒミコぞ！」
兵たちはお堂が揺らぐほどの雄叫びで答えました。そしてモモちゃんは兵をひきいて悠々と、寺から歩み出て行きました。
静かになって僕もお堂から出て行くと、一緒に預けられていた男の子五人が駆け寄ってきました。よく見れば、僕ら以外、寺には、あちらに、こちらに、死体が転がっているだけでした。僕らは和尚さんを捜して城山まで走りました。
城山にも殺されたお役人やお侍の死体が数え切れないほどに転がっており、その中に僕らは和尚さんを見つけて駆け寄りました。虫の息だった和尚さんは、兵たちが墓穴から出てきて、そしてモモちゃんに率いられて墓穴に戻ったことを簡単に話し、僕たちに向かって呪文のような文句を唱えました。
おんかぁかぁかぁびさんまぇぃそわかっ！
そして僕らは、公園で泣いているところをお巡りさんたちに発見されたのでした。
モモちゃんだけが消えていました。
僕らは連れて行かれたテントで、お巡りさんたちに、何が起こったのか、正直に、きちんと、極めて正確に、筋道立てて話しました。けれどお巡りさんたちは首をかしげてため息をつくばかりで、ほとんど信じてはいない様子でした。
「じゃあ、モモちゃんは兵に連れて行かれたんだね？」
「ちがうよ、兵を連れて行ったんだよ。モモちゃんはね、ヒミコになったの」
僕は見よう見まねで、モモちゃんが飛び跳ねている様子と、モモちゃんが歌った歌を再現したのです。
「いざ子ども、吾はヒミコぞ！」
なのに、話にならぬ、と言った様子で、
「じゃあずっと、城山のすぐ下のお寺にいたんだね」
「うん大超寺って言ってた」

「確かに城山の下に昔は大超寺があったらしいけど、でも、大超寺は何百年も前に別の場所に移って、城山の下には小さな地蔵様が残ってるだけだよ」
「でもお寺があったよ。大超寺って」
お巡りさんたちは何か話し合ったあと、とりあえず家に帰そうということになったようで、僕らはお父さんお母さんに引き渡されました。
次の朝、お父さんの知り合いで、遠山さんという画家が、僕の話を聞きたいとやってきました。
「横穴の中にみんなで入ったんだね」
「うん、そう」
僕はまた、遠山さんに、僕らに何が起こったのか、正直に、きちんと、極めて正確に、筋道立てて話しました。
遠山さんは首をかしげることもなく、本当に信じてくれている様子でした。
「モモちゃんはヒミコになったんだね」
「そう」
僕はもう一度、遠山さんと、そしてお父さんお母さんの前で、モモちゃんの飛び跳ねている様子を再現しました。
遠山さんは、
「兵たちはね、モモちゃんのことを『トトビモモソヒメ』って、言わなかったかな？」
そうでした！　まさにそう呼んでいました。僕は、
「言った！　そう言って呼んだ！　トトビモモとか、そういうの」
「間違いない」
遠山さんはお父さんお母さんの方を見てニッコリと笑いました。でも、お父さんお母さんはどう反応していいかわからない困り切った笑顔を作ったようでした。
「城山はヒミコの墓だろうって、僕はずっと昔から思ってた。『日本書紀』に出てくるヤマトトトビモモソヒメこそがヒミコなんだっ

てね。いいかい、トトビとは鳥のように飛ぶこと、モモソとは百回ってことで、鳥のようにたくさんたくさん飛び跳ねる姫ってことだ。飛び跳ねるようなダンスをしてトランス状態になるのは東アジアの巫女では珍しいことじゃない。バンブーダンスも、きっともとは巫女がトランスにはいるための踊りだったんだ。やっぱりヒミコは人名じゃなかったんだ！　これはワ族が連合を作るときの象徴的な巫女の職名なんだ。来てくれ」

僕は腕を引っ張られ、

「この子、借りるよ」

そのまま城山に連れて行かれました。

「君たちが横穴に入ったのはおとといの何時頃だったかな」

「お昼前」

「やっぱり……」

横穴の前に立つと、遠山さんは大人の懐中電灯で奥を照らしました。

僕はびっくりして声を上げそうになりました。

そこには赤や青や白で、三角の模様がびっしりと描かれていたのです。

「これは見てなかったんだね」

「誰が描いたの？」

「僕だよ。僕がおとといの朝に一晩かけて描き上げた。昔の史料をもとにね。やっぱり、この模様は異世界への通路だったんだ」

僕は何か不吉な感じを受けました。

「モモちゃんは、もう帰ってこないの？」

「この模様を描き上げたあとで、実は僕はね、まるでこの世にいないような、奇妙な気分になったんだ」

遠山さんは僕に答えず一人で話し続けました。

「それで、一カ所だけ、魔除けのつもりで余分なものを描き足した」

遠山さんがライトの光を当てた箇所には、お地蔵さんが手を合わせる画がありました。

「でもこれを描き足したのは昼すぎだったから、君たちが消えたあとだったんだね。ちょっと遅かったんだ」
「モモちゃんは……」
「いいかい、これから僕が言うことを良く聞くんだ」
そう言って遠山さんは僕の前にしゃがみ込むと、僕の両肩を両手でグイッと掴み、僕の顔をじっと見て、涙声で、
「僕はこれからこの穴に入って、モモちゃんを助けに行く。そのために、あの地蔵様の画をこのペンキで消して、もとの装飾を復活させる。そのあとでこの穴の反対側へと出て行く。多分、僕は二度とこの世界には帰ってこれないと思う……でも、そうなっても、君は逃げちゃいけないよ。僕は懐中電灯を置いていくから、冷静に、このペンキで、もう一度あの地蔵様の画を描き足すんだ。出来るだけ早く。その間、息もあまりしない方がいい、いいね。そして、間違っちゃいけない。向こうじゃなく、こちらへと出てくるんだ」
遠山さんは横穴へと入り、しばらくすると気配がしなくなり、僕が入ってみると壁を照らす懐中電灯だけが地面に置かれ、誰もそこにはいませんでした。
僕は遠山さんに言われたとおり、息を止め、へたくそな地蔵様の画を描き、すぐに外へと駆け戻りました。
するとなにかピンと来るものがあり、僕は大超寺へと走りました。今ではお地蔵様の小さなお堂があるだけなのに、僕には全てがわかっていたのです。
お堂の中の座布団の上では、モモちゃんが膝を抱いて心地よさそうに眠っていたのでした。まるでお地蔵様のように。
遠山さんは洞窟の中でペンキの溶剤に中毒して倒れているところを発見されました。病院で目が覚めても、魏の鏡がどうとか、ヒミコがどうとか、モモちゃんを救い出すまでの、その世界で活躍したらしい自分のこととかを、ギラつく遠い目で喋りつづけていたそうです。もちろん、誰もまともには聞きませんでした。
そして僕らもみんな、洞窟に満ちたペンキの有機溶剤のガスで記

憶が変になったんだろうと言われています。
でも僕だけは知っています。お地蔵様がモモちゃんの身代わりになったんだってことを。だって、みんな出てきたのに、お堂のお地蔵様だけが消えたままだもの。
僕の故郷の話でした。（『妖女伝』第三話「ヒミコ」）

官能小説の女

1

「経験がないから書けないなんて言い出したら、じゃあ犯罪小説はどうなんですか？」

またそういう陳腐な例を出してきて、それでこっちを追いつめたつもりなのか？

もういい加減勘弁してくれよ。君の相手するのも苦痛になってきたぞ。

「だから、僕の言っているのはね、そうだな、体験と経験は違うってことだ」

「は？」

「君は人を殺したことがあるかね」

「ありませんよ。あったらこんなところにいません」

「だろ。でも、人を殺したくなったことは？」

「それはあります。あ、体験と経験って、そういうことですか」

「そうだ。つまり、犯罪を犯したことがなくても、犯罪を犯そうと思ったことはあるかもしれないじゃないか。人を殺したくなったり、万引きをしようかとおもったりね。犯罪を体験してなくても、でも心の中では経験してるかもしれない、その意味ではみんな犯罪を経験してるんだ」

「でもそれだったら…」

面倒だから遮る。

「君の場合、書きたいモノがモノだろう」

「でも、犯罪小説は書けて、官能小説はどうして駄目なんですか」

「だから、君の場合、体験じゃなく、経験も欠けてるだろ。このまえから何度も聞いてるじゃないか、君は欲情したことあるのか？」

「ないんです」

「根本的に駄目じゃないか」

こいつ、考えこむ。でも、こんなこと、考えこむようなことかね。
「だったら……」
決然とした目で俺を見る。
「先生、私を欲情させて下さい」
おいおい！
そんなマジな目で見るなよ。
「君、君は……」
舌が回らない。あわてるなよ、俺！
「君は、自分の言ってる意味がわかってるのか！」
「わかってますよ。セックスして下さいって言ってるんです。一回では欲情しないかも知れないから、私が欲情するようになるまで相手して欲しいんです」
落ち着けよ、落ち着けよ、俺！
「ど、どうして僕なの？　ボーイフレンドぐらいいるでしょ」
「いません。それに、多分、若い子はへたくそだと思うんですよ。私を欲情させるより、自分の欲情を満足させるのを優先させるような気がして」
「それで、僕が喜んで、うんって言って、それで君を抱くと？」
「だって、先生はご著書で言ってるじゃないですか、男と女の間にはあらゆるタブーは存在しないって。常識も道徳も疑えって。体だけの結びつきも、婚姻外の恋愛も肯定せよって」
あれは……あれは、まだ大学内のセクハラが問題になる前に書いた本で、当時は、あれを読んでカブれた女子学生を数人むさぼり食ったもんだったが、今はまずいだろ、ちょっと。
「だから私を欲情……」
「知ったようなことを言うんじゃない！」
だいたい、今、あのころと同じことをしてバレたら確実に失職だぞ。時代は変わったんだ。
「先生の言うこと矛盾してる」
「子供が理屈を言うな！」

娘をしかるように声を荒げると、こいつはいったん肩を縮めてうつむき、そしてそうっと目を上げ、
「本当のこと言っていいですか」
「嘘を言うよりいいだろ」
「先生って、実は私、全然趣味じゃないんです」
「なんだって？」
「私、ハゲはだめなんですよぉ」
ムカつくことを平気で言う！
「だから、先生だったら、私、絶対に深入りしない自信があるし……」
もう終わりだ。帰ってもらおう。
「ありがとう。君のような聡明な女性に見込まれて僕も嬉しいよ。今日はもう時間がないし、これまでにしよう。君もあまりバカなことを考えるんじゃない。それにテストもすぐだろう。さあ、帰って帰って」
木下明美は名残惜しそうな顔を作って研究室を出て行った。
とんだ学生に見込まれたもんだ。
だいたい、十九になったばかりで官能小説を書くだと、それも何かの商業誌の官能小説賞に応募するために。
官能というモノを、小説というモノを、あるいは文学というモノをなんだと思っているのかね、君は。
「文学ですかぁ～」
あの時も、問いつめられてふてくされたような顔をしたな。
「字幕しかない映画？　って感じ？　やっぱりつまんないですよね」
気の利いたことを言ったつもりで、ひとり笑う。あのなぁ～、殴るぞ、こら。
「君はそんなつまんないものを書きたいわけだ」
「だって、映画とかだったら、お金かかるじゃないですか、小説はパソコンさえあったら書けるし」
「チープだからね」

「そうなんです！」
我が意を得たりと笑う。皮肉も通じない。
「でも、いくらチープでも、内容って必要じゃないですか。でも、私には内容のあるようなものが書けるとは思えないし、でも、えーと」
何が言いたいのか自分でも混乱してしまってる。まったく。
「私みたいな若い子の書いた官能小説なら、誰だって読みたいと思うじゃないですか」
「誰だって、ねえ」
「先生は読みたくないですか？」
「君が書いたモノはね」
「あ～ひどぉ～」
顔をしかめてみせる。
「とにかく、書きたかったら一人で書くんだね。創作ってのはそういうものだから」
その日は話を打ち切って帰ってもらった。ところが翌日から毎日、研究室に押しかけてくるじゃないか。
女子学生が一人で来たときにはたいていドアを開けっ放しにして応対することにしてるのだけれど、こいつとの話は隣のフェミニストには絶対に聞かれたくないから、
「ドアを閉めたまえ」
「密室ですね」
嬉しそうに言う。
で、またエロ本談義、今日に至る。
そしてついに、欲情させてくれ、だと。
確かに木下明美、ちょっとした美人ではあるが……。

2

私十九歳、ピチピチの女子大生です。どうか私の経験を聞いて下さ
……
……

渡された原稿の一行目で嫌になった。それに段落の最初は一字下げだろう。こんな基礎的なことも知らずに何を書くのかね、君は。
「どうですかぁ？　これで、最初のつかみはバッチリだと思うんですよぉ」
うんざり。
「ああ、その通り、バッチリだね」
「でしょ」
嬉しそうに。ホントに何の皮肉も通じない。
「だから」
弾んだ口調で。
「あとは経験を書けばいいだけなんですよ」
「君はこれまでの生涯で、最長、何枚ぐらいの原稿を書いたことがあるの？」
「え～と、高校の頃の読書感想文が五枚」
「今回は何枚のものを書こうとしてるの」
「だいたい二百枚程度って、応募規定には書いてました」
「五枚しか書いたことがなくて、今回、いきなり二百枚かね。そりゃ無理だって、自分では思わないの」
「思いません」
きっぱりと。
「だって、どんな偉い作家だって、最初は全く書いたことなかったはずだし」
何を言っても無駄か。
「じゃ、この続きに当たる部分ね、私十九歳、から始まって、カレが出来ましたまでだね、この原稿は。じゃ、これ以後、どうやって膨らませるの」
「デートしました、それから、ホテルに行きました、セックスしました、感じました」
「それが官能文学か？」
「違うんですか？」

「根本的に違うね」
「どこがですか？」
「君は官能とかいう以前に、文学そのものもわかってない。君はいったい、何の小説を読んでるの」
「最近は何も読んでません」
またまた、きっぱりと。はずかしげもなく。
「だって、ヘタに読んで影響されちゃいけないでしょ、やっぱりオリジナリティって大事にしたいと思うんですよぉ。書く前って大事な時期だし……」
しゃあしゃあとよく言うよ……もう我慢ならん！
「生意気を言うな！」
本気の怒鳴り声に驚いたのか、肩が飛び上がった。
「一人の教師として言っておく。世の中を舐めるのもいいかげんにしろ。まずは小説を目が潰れるくらい読んでこい。話はそれからだ。今日は帰れ」
顔がくしゃくしゃに崩れ、
「だって……」
あ～あ、泣いてるよ。俺が泣かしたのか？
「だって……」
涙が頬をスーッと流れる。
スン、スンと鼻をすする。
泣き顔もまた、ふるいつきたくなるほど可愛いじゃないか。
そう思った瞬間、こいつは涙に濡れた目をこちらに向けた。
見透かすように。
照れ隠しもあってティッシュの箱を差し出すと、そっと押し戻し、自分のスーツの胸のポケットからハンカチを出す。見れば胸もけっこう豊かだ。形も崩れてないし。さすが十九歳と言うべきか。
「だって、先生、何を読んだらいいか教えてくれないじゃないですか」
おいおい、そんなこと一度でも聞いたか？

「私、何を読んだらいいんですか」
涙に濡れた目をさらに近づける。
妖艶ですらある。
おいおい、こっちが欲情してどうする。
「締め切りはいつなんだ」
「十月の末日です」
「あと四ヶ月……」
「一日二枚書けばイケルと思うんですけど」
「駄目だね。五枚づつ書くんだ。それで、夏休み中に何が何でも完成させるんだ。それから、俺も読んでみて、その小説に何が足りないかを検証する。今、読書リストを作ってやるから、泣きやんだら持って帰れ」

3

試験、採点、と、くだらぬ雑用をすますと夏休みだ。
この夏ほど、夏休みが早く終わらぬかと思った夏はない。
夏休みが終われば、木下明美が小説を持ってくる。どうせ箸にも棒にもかからないものだろう。で、俺は叱りつける。木下は言うだろう。
『だから言ってるじゃないですか。私を欲情させて下さいって』
俺は渋々とした表情で応じる。内心はもう、十九の夏のように燃えているが。
十九歳になったばかりの女、欲情の意味さえ知らぬ女、この間まで少女だったまだ青い果実！
妻と最初にやったのはあいつが二十二の夏だし、それ以後も二十歳をこした女としか、やったことはない。十代の女を抱く！　それも木下明美のような美人を！　それも向こうの意志で！　欲情するまで！
いや、ここは思案のしどころだ。
初めてセックスというものを知ってから二十年、俺の持っている

全てのノウハウを注ぎ込んでしまえば、最初の一回で木下明美は欲情してしまうかもしれない。
「これなんですね、欲情って。わかりました」
とか言ってそれで終わりになるだろう。
それはまずい。
やっぱり少しずつ少しづつ、教えていくのがいいだろう。男についても、一気にではなく、徐々に、徐々に、教えてやろう。
俺はラブホ街をうろついて適当なところを品定めしたが、やっぱりラブホはまずいだろう、と、きちんとしたホテルに部屋を取ろうと思い直した。何せ相手は十九歳だ。十八以下にさえ見られかねない。すわ児童売春、などと、もし受付で呼び止められたりしたら不愉快だし。
とまあ、色んな妄想と計画と、ベッドに入ってからの微細な部分まで様々に検討を重ねつつ、まるで十九の夏のような欲情を燃やす休みはすぐに終わった。
ところが、木下明美、何も持ってこない。
どころか、講義が終わるとそそくさと逃げていく。
講義中も、絶対に俺と目を合わさない。
夏休み明けの二回目の講義の後、俺は木下明美を廊下に呼び止めた。
「夏休みの課題はどうしたんだ」
「そんなの出てましたか？」
と凍りつくような表情でトボケる。
「君にだけ……」
「ごめんなさい、待ち合わせがあるんで」
そういってクルリと向こうを向き、膝に青いスカートをひるがえして走っていった。
いったい何がどうなったんだ。
俺は呆然と立ちすくんだ。
そしてその夜、前に木下明美が勝手に置いていったメモ用紙の携

帯の番号にかけてみた。
「えぇ～先生困ります、こんな時間にかけてこられても」
「そんなこと言うなよ。君はもう小説書くのをやめたのか」
「やめました」
またきっぱりと。
「どうして？」
「だって、先生が作ってくれたリストの一冊読んだだけでも気分が悪くなったんですよ。私に官能小説なんか、最初から無理だったんです」
「おいおい、そんなに簡単にあきらめるのか？」
「だって、書けないですよ、私才能ないし。じゃあ切りますね」
プツッ。
何という身勝手！
何という気まぐれ！
俺の気持ちはどうしてくれるんだ。
「先生しつこいですね」
たった二回の携帯で言うか！
「しつこかったのは君だろう。いったい何回、僕の部屋に来たと思ってるんだ」
「だから、それは謝ります。私、自惚れてたんです。才能も何もないくせに、小説が書けると思いこんでたんです。ごめんなさい」
「だから、なんでそんなに簡単に……」
プツッ。
「君はいったい、僕の気持ちを……」
プツッ。
「欲情させ……」
プツッ。
「これは間違いなくあなたの声ですね」
教授会で、隣の部屋のフェミニストが再生したテープの声は、否定しようもなく、明らかに、俺のものだった。

「セクハラです！　ストーカー行為です！」
昔は俺とも肉体関係のあったこのフェミニストは誇らかに宣言した。
十年前より二十キロは増えたであろう脂肪がこいつの頬をもブルブルと震わせていた。
抗弁は何も認められず、俺は失職した。
今は牛丼のチェーン店に就職して一軒を任されている。
これはこれで、やりがいのある仕事である。
（『妖女伝』第四話「官能小説の女」おわり）

まつりごと

1

「とにかく今は大事な時なんだから、おねがい、あなたさえ黙って、我慢して、嵐が過ぎるのを待って。ホンのいっときなんだから、解ってるでしょ、あの人の性格。あなたが今、大人にならなきゃだめなんだから」

そう諭されてみればその通りだし、結果としてはまた俺が我慢することになるんだろう。解ってる。全部解ってる。それでも。

「だから言ったでしょ！　ここの地の色は赤じゃなきゃ駄目なのよ、それも黒みがかった赤でなきゃ！　緑なんかだれが指定したのよ！」

あの女がわめいてる。あのなぁ～。その色指定は自分がやったんだろ。字の色との兼ね合いで、そこは赤系統しか駄目だって俺がさんざん言ったのを、無理に緑にしたんじゃなかったのか。ほらご覧なさい、まったく文字が見えませんよ、ってパソコンの画面できちんと説明したのに、

「今の人は本ッ当にダメね、何もかも画面で済ませてしまう。いい？　パソコンの画面ってのは光源なのよ、印刷物は反射光なの。その辺の微妙な感じは、もう経験でしかわからない世界なの。これは上品に仕上げたいの、インパクトは二の次よ」

で、今朝あがってきた見本ビラの文字は見事に地に沈んでしまっている。

目を凝らさなければ読めない。

これじゃ選挙のビラとか言う以前に、人に読んでもらうものとは言えんだろう。

あの女、一目見て、

「何これ！　誰がこんな色、指定したの？」

こうして毎日恒例の発狂寸前。手がつけられなくなる前に処方。すなわち、俺の出番ってわけ。

「あ、この色遣いですか？　ちょっと僕の指定ミスみたいですね、やっぱり弱いですね」
「弱い？」
さあ始まるぞ、ネチネチ攻撃。
身構えるが頭の中は澄み渡っている。
あの女も攻撃対象を見つけた安堵感に、発狂エネルギー値が下がってきている。
顔でわかるんだよ、もう発狂はない。
俺が我慢すればいいだけの話さ。
「はい、申し訳ありません」
「なんで、こんな色遣いにしたの、それも私に無断で！」
「申し訳ありません」
そう言いながらも、よくもまあこれだけ自分の都合のいいように記憶を操作できるモンだと感心するよ。やっぱり政治家に向いてるよ、あんた。
「こんなの配れると思う？」
「思いません」
「自分でも思わないようなものを何で作ったのよ」
「申し訳ありません、ミスです」
そう言いながらも、よくもまあここまで責任転嫁できるもんだと感心するよ。当選する前から実に立派な政治家だよ、あんた。
「ミス！　ミスですって、皆さん聞いた？」
ほらあなた、などと新入りの、まだ名前も憶えていないボランティアに声をかける。
「こんなミスをするのよ！　いちばんの古株が！　いったい何を考えているんでしょうねぇ、全然成長してないなんて、あなたはこうなっちゃ駄目よぉ」
新入りはあまりのことに苦笑も出来ない。
こういう光景がいかに人を遠ざけるか、あの女にはそんな気遣いもない。

俺の方に向き直る。
「この時期のこのミスがどれだけ痛いか！」
「申し訳ありません」
基本的には謝るしかない。とにかくこの女が候補者なんだから！
我慢だ我慢、心を閉じろ、精神を殺せ！
「謝れば済むの、ふ～ん、謝れば済むのね、あなたは。あなたなんか、どうせ無名のいちボランティアだからね、私がこの選挙に落ちたって、どっかで静かに暮らしていけるんでしょうよ。でも、私がもし落ちたら、私はどうなるのよ、そのこと考えたことある？」
「はい」
そう言いながらも、また始まった、と心を閉ざす。まともに相手になんかできるか、こんなの。
「嘘よっ！」
「申し訳ありません」
「あなたなんか、どうせ私の選挙をお祭りみたいに考えて、なんか面白いことないかな、ぐらいの気持ちで来てるんでしょ。だいたい、選挙のボランティアにやってくるなんて、世の中からあぶれた出来損ないばかりじゃないの？　自分でもわかってるんでしょ、自分は、自分で、自分がよくわからない人間ですって。だから自分探しに来てるんですって。顔に書いてるわよ。そんな人間はまずカウンセリングに行きなさいって。そんな人間に私の必死さなんかわかってたまるもんですか。だからこんなミスをして平然とした顔でいられるのよ。いい？　私のこの顔、あちこちに顔写真貼られて、テレビにも出て、雑誌でも叩かれて、みんな知ってるのよ。私は落ちたらゼロじゃないのよ！　マイナスなのよ、もうどうしようもないドツボなのよ！　なんでわかってくれないのよ！　あなたッ！」
「申し訳ありません」
「謝るのはもういいわよ、耳にタコができた。あんたなんかとつき合ってると耳そのものがタコになるわよ！　それよりどうするのよ、これ」

「実は、見本、三種類あるんです、これとこれも」
そう言って、こっちこそ無断で発注していたビラ見本を差し出す。
そのうちの一枚を見るなり、この女の顔が悦び色に変わる。
「これよ、これ！　私が指定したのは！　あるんじゃない。最初にあんなの見せるからびっくりしたわ、これよこれ、いいじゃない」
記憶を都合良く操作して機嫌も直り、鼻歌を歌いながら選挙カーへ。
ボランティアたちが俺に感謝の視線を送ってくる。
事務所の空気が安堵色に染まる。
「木下明美、木下明美をよろしくお願いします！　クリーンな政治、新鮮な政治、国政の場に若い女性の力を注ぎましょう！　金権腐敗、官僚独裁もうごめん。対話の政治、思いやりの政治、弱者の視点に立った、新しい政治を作りましょう！　暮らしの視点を永田町へ！
暮らしと永田町の距離を近くする、木下明美、木下明美をどうぞよろしくお願いします」

2

なんでこんなことになったのか、なんで俺はここであの女の秘書をしているのか。それもボランティアで。だいいち、もはや俺は、あの女が議員として相応しいとは思っていない。いや、この期に及んで、あの女が議員として相応しいと思っている人間など、この事務所の中にただの一人でもいるものか。みんなもう、辟易して辟易して、それでもほんの少し我慢すれば嵐は過ぎ去っていくのだからと、心を閉じ、精神を殺し、我慢に我慢を重ねているだけではないのか。そうだろ、みんな。ちょっと聞くが、本当にあの女を議員にしたいのか？　そう聞けば、
ノー！　と一人残らず答えるに違いない。
なのに、なぜ、俺はここにいて、あの女の選挙を手伝っているのか。
もちろん最初はこんなじゃなかった。あの女にもまだ節操があっ

た。まず怒っても怒鳴らなかった。さらには個人攻撃もしなかった。ところが今や、どうだ。なにか問題が起こるたびに責任者をでっち上げ、ネチネチネチネチいびりまくる。それも男に対してはまだ手加減があるが、女に対しては、もう際限なし、泣こうが、逆ギレで叫こうが、しつこく、執拗に、気が済むまでなぶりぬく。とにかく女を虐めたいんだな。だから、あの女が何かで叫き始めると俺の出番がやってくる。怒鳴られ係、嬲られ係。

これであの女の外ヅラが良ければまだ許される部類だろう。ところが外部に対しても同じなんだな。あの女自身が一言詫びればすむような場面で、下らない言い訳、ヘタな言い逃れを並べ立てて一歩も引かない。プライドを守り抜いているつもりなのか知らないが、ちょっと引いたところから見ると、そのくだらなさは横綱級だ。そんな議論で、相手が呆れて去っていけばこちらの勝ち、だとでも思っているのかよ、おいおい。

これでもし当選したら、国会で何を議論するつもりなのか。

ふと考えてぞっとする。

俺はこの女を議員にしようとしているのではないのか。そのために分刻み秒刻みのスケジュールで動き回り、二度も倒れて点滴を受けながら、それでもこの女のために町内会を回り、組合に頭を下げ、ミニ集会を主催しては作り笑いに顔を引きつらせているのじゃなかったのか。それも無給で。

二ヶ月前、

「一緒に国会に行こうよ」

そう言われて悪い気はしなかった。

最初はインターネットでしか知らない相手だったけれど、自身が主催する掲示板へのあの女の書き込みは意表をついた比喩に彩られ、また受け答えも誠実で、奇妙な魅力に溢れていたよ。初めてのオフ会でも凡人の中でギラギラと輝いていたな。そのオフ会も回を重ねるごとに盛況だったし、この二年間、みんな楽しくやってたよ。立候補について相談を受けたときには驚いたが、俺は驚きながらも賛

成した。なにせ俺は当時ついていた仕事に飽き飽きしていたし、あの女が夫以外でいちばん心を許していたのは俺だったから、もし通ったらそのまま秘書として就職したらいい。そういう打算もあったのさ、ハハ、ハ。

で、今朝、あの女が突如、新しい公約を発表した。

「当選したら秘書を公募します」

企業、団体からの出向などという形ではなく、本人の能力とやる気を見て秘書を決めるのだと。

あの〜、僕も公募してよろしゅうございますか。

そう聞けばいいのか。

あるいは、公募の書類を議員様になったあの女宛に送ればいいのか。

さっき手渡された、秘書公募のコンセプトのメモをパソコンに打ち込みながら、結局これは俺への三行半なんだと気づき、煮えくりかえる思いに煮えくりかえりながら、でもあの女が通ってオサラバできるならそれもいいじゃないか、などとまた自分をなだめている自分を発見して、それでも悔し涙さえ出てこない自分のふがいなさに呆れもし、情けなくも思い、結局、与えられた仕事を淡々とこなしているのだった。

あの女を議員にするために。

3

そしてあの女は僅差で当選した。国会議員になった。

議員になったら何をやりたいですか、などと選挙運動中にインタビューで聞かれ、今は選挙に必死でゆっくり考えられません、などと顰蹙買いまくりだったのが、通ってみれば、これから考えます、だと。確かに正直でいい。が、結局、こいつに入れた有権者は何を思って投票したんだね、通ることしか考えてない女に投票し、それで良かったのかね。

俺は遠山の部屋のテレビを勝手に切った。

ワイド画面に大写しになったあの女の顔など見たくないから。
「これで良かったんだよ。大衆のバカさ加減がわかっただろう」
遠山は俺の顔を眺めながら続けた。
「お前の顔は変わったよ」
「そりゃ、痩せたもの。この2ヶ月で4キロ痩せたよ。ガリガリだ」
「そんな意味じゃないんだ。どう説明したらいいか……お前、この前まで、選挙だとか政治だとかにそんなに過剰に思い入れをしてたか？」
俺は少し考えて答えた。
「それは、ないな」
「だろ」
遠山は畳みかけるように、
「だいいち、お前、これまで投票に行ったことあるのか？」
「あるよ！　失礼な」
「何回？」
「二回」
「あとは棄権か」
「ああ、なんか色々あって、投票には行けなかった」
「そんなものだろう。選挙に必ず行くなんてのは利権がらみか、共産党か、公明党だよ。一般の国民にとっては、選挙なんてどうでもいいんだ」
「現状ではそうだと思うよ。でもそれじゃ駄目だってことで、今回……」
「お前の言うバカ女を国政の場に送り込んだってわけだ」
ぐうの音も出ない。遠山は哀れみの目で続ける。
「俺は選挙に行ったことはないが、選挙制度自体は否定しないよ。政治家に目に見える形で権力の正当性を与えるという意味では、最高の形だからね。だからといってこんなものに俺が参加する必要はないだろう。俺抜きでも権力の正当性は維持されていくからね。もちろん、正当な権力があることによる政治的安定性の恩恵には充分

浴させてもらっているから、申し訳ないとは思う。でも、やっぱり、政治につきまとう、どうしようもない胡散臭さは俺にはやりきれん」
「そうやって政治から逃げる人間が増えたから……」
何かひどく教条的なことを口走りそうになって、俺は口を閉じた。
「まあ、お前はよくやったと思うよ」
遠山の目が優しくなった。
「本気か？」
「ああ、でもまた同じことをしたいなんて言ったら、俺は体を張ってでも絶対にとめる。これ以上お前がボロボロに……」
その時、突然テレビの電源が入り、あの女の顔が大写しになった。
あの女は遠山をにらみつけ、テレビの枠を握り、頭から肩をズルリとこちらへと乗り出した。ワイドだからか、少々太って見えるあの女はそのまま手をついて部屋の中へと入ってきた。入って来るなり、
「アナタみたいな人間が居るから、この日本の政治が駄目になったのよっ！　さあ体を張ってもらいましょうかッ！」
あの女は身動きひとつ出来ない遠山の喉に食らいつき、バリバリと音を立ててへし折った。
噴水のように吹き上がった血が天井からネチャッと落ちてきた。
「醤油ッ！　気の利かない人ねッ！」
俺は遠山の台所から醤油を取ってあの女に渡した。あの女はまず遠山の頭に醤油をダラダラと回しかけ、顎の当たりから食い始めた。
飛び散る血と骨の砕ける音、飛んできた脳漿の生臭さに、俺は畳にへたり込んで涙と大小便を垂れ流しながら動くことも出来なかった。
女はボドッと畳に落ちた遠山の目玉を拾い、
「あなた、なんで今日の大事な場にいなかったのよ、え？」
口に入れてブチャッと噛みつぶした。
俺は何も言えなかった。
「え？　どうしたのよ」

腹を割いて取りだした、湯気の立つ生き肝に醤油をかけながら、
「ふん、答えられないようなこと、するんじゃないよ」
そう言って肝を一口かじると、今度は腹に首を突っ込み、まるでラーメンのように、ズルズルと音を立てて腸を啜った。
「酒！　酒がないわ！」
俺はさっきまで飲んでいた燗酒を渡した。
一口飲んで、
「本ッ当に粗悪な酒ね、でも無いよりはいいわ」
酒、肉、酒、肉、酒、肉の一時間ほどの惨劇が終わり、遠山は骨格だけを残して消えてしまった。
血まみれのあの女はこちらを睨みつけた。
「さあ行くわよ、政治よ、政治、アナタは明日から国会議員の秘書なのよ、しょぼくれた顔してないで、シャンとするの！」
「秘書？」
俺はやっと口を開くことができた。
「そうよ、アナタにはこれまで以上に頑張ってもらわないと」
「秘書は公募……」
「だってアナタ、たった今、応募したでしょう、採用よ、採用。採用してあげる」
「あ、あの、国会議員の秘書みたいな立派な仕事、ボクみたいなモノに務まるでしょうか」
「だから頑張ってって言ってるでしょう！　シャンとするのよ、シャンと！」
「あ、あ、ありがとうございますっ！　もったいのうございますっ！」
俺は感激の涙を流しながら、遠山の骨を蹴り飛ばし、血の池に土下座して額を畳にすりつけた。
「行くわよ」
先生はおっしゃってテレビの画面に向かいました。
私も先生に従ってテレビの画面に入っていきました。

最近では人肉の味も覚え、恰幅もよくなった私は、すっかり秘書らしくなったと言われています。先生の山よりも高く海よりも深いご恩に感謝する日々です。（『妖女伝』第五話「まつりごと」おわり）

『妖女伝』もこれで終わりです。
お楽しみいただけましたでしょうか。
それではまたどこかでお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1179d/

妖女伝

2010年10月8日15時56分発行